

いかなる嫌がらせを受けても： 嫌がらせに関する個人の地理学

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学都市研究プラザ 公開日: 2022-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Valentine, Gill, 須崎, 成二 メールアドレス: 所属: シェフィールド大学, 明治大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2003172

Title	いかなる嫌がらせを受けても：嫌がらせに関する個人の地理学
Author	バレンタイン, ジル / 須崎, 成二[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 25 巻, p.85-104.
Issue Date	2022-03
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学都市研究プラザ
Description	Antipode 30(4), pp.305-332, 1998. / Copyright ©1998 by the Author Reprinted by permission of John Wiley and Sons
DOI	

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

いかなる嫌がらせを受けても ——嫌がらせに関する個人の地理学——

ジル・バレンタイン *
(須崎 成二 ** 訳)

GILL VALENTINE

Sticks and Stones May Break My Bones: A Personal Geography of Harassment

Antipode 30(4), pp. 305-332, 1998.

Copyright ©1998 by the Author

Reprinted by permission of John Wiley and Sons

個人の地理学を書くこと

1970年代のイギリスと北米のフェミニズムの中心的な教義であり、当時を象徴する言葉「個人的なことは政治的なこと」によって、個人的な経験の権威は典型化された。それは、社会科学において多くの個人的な証言を生み出した。しかし、社会学や人類学、文学、文化批評におけるフェミニスト研究者に比べて、フェミニスト地理学者は自らの内実を学界内で明かすことに、最近まで慎重であった（例外として、例えばChouinard and Grant 1995; Women and Geography Study Group 1997; Bondi 1997; Moss 1998）。実際、社会学と人類学では、伝記的・自伝的な記述が方法論の源として、またはその記述自体が「方法論」そのものとして書かれることに対する批判がある。（例えば、Stanley 1992; Okely and Callaway 1992を参照）。

地理学の分野において自己再帰性という課題は、自伝的な執筆の問題よりも研究過程における研究者のアイデンティティとポジションに重きが置かれる（McDowell 1992; Katz 1992を参照）。フェミニスト、ポストコロニアル、構造主義などを含む批判地理学者は、「全ての知識は特定の状況で生み出され、その状況が何らかの形で知識を形成している」（Rose 1997: 305）と主張し、この分野における偽りの中立性に異議を唱えている。その結果、研究において生じる関係性の中で研究者のポジショナリティを内省し、その内容を論文に書き込むことで、具体化され位置づけられた知識の性質を明確にすることができると主張される。そして、その主張は地理学雑誌の特別号やコレクションの中で頻繁に繰り返されている（*Environment and Planning D: Society and Space* の第10巻[1992年]、*The Professional Geographer* の第

46巻[1994年]、*Antipode* の第27巻[1995年]などを参照）。Rose(1997: 311)は文献のレビューの中で「自己と文脈の両方を完全に知ろうとすることの不可能性」を指摘し、研究に組み込まれた権力関係に関する自己反省の多くを批判している。実際に、ローズはButler(1990)を引き合いに出している。パトラーは*Gender Trouble*の中で、アイデンティティは私のパフォーマンスより先に存在しない非常に不安定なものであると指摘する。パトラーは、同時に、アイデンティティは関係性がある（社会関係を通じて相互に構築される）ため、研究者にとって研究は構築的なものである、とも主張する。Rose(1997: 316)は、「研究者や研究対象者、研究はお互いを作る。つまり、研究と自己の「双方向のテキスト」」と述べている。ここで、ローズはそのテキストが複雑で、不確かで、不完全で、権力で満たされたプロセスであると主張する。

ローズの論文を読んで、私は自身の研究や執筆、地理学の分野を通して、どれほど自己のアイデンティティが形成され、作り直されてきたかを潜在的に実感した。Gibson-Graham (1994: 206) は、自らを知の主体や中心的な主体ではなく、むしろ「中心のない、はっきりしない、完全には存在も表現もできない」ものであると主張した。その際、私はグラハムによって説明された自己反省の難しさを認識した。そして、ローズの論文は以下のことを私に考えさせた。私の認識が偽りの中立に見える場合でさえ、研究と執筆からどれだけ自分の存在が欠けているのか。私のセクシュアルアイデンティティ、地理学の研究、学術的アイデンティティがどれだけ相互に関わり合いながら形成されていたのか。

私が学者としてのキャリアをスタートさせたとき、研究テーマとしてセクシュアリティの地理学(例

* The University of Sheffield (シェフィールド大学)

** 明治大学 研究・知財戦略機構 研究促進員

えば、Valentine 1993a)を選んだのは、特にレズビアンとしての個人的な経験が大きな動機であった。しかし、私は決してこの分野でカミングアウトしなかった。レズビアンであることが研究の動機となっていたとき、私はセクシュアルアイデンティティと研究の関係が相互的なものであると、一切考えていなかった。実際、私は自らのセクシュアリティを明言せずに、地理学界を渡り歩くことができると純粋に信じていた。しかし、それゆえに、私のテキストが意図しない方向に解釈される可能性を忘れていた。この場合、私は「レズビアン地理学者」と思われていたため、自らの学術的アイデンティティは性的な意味合いを持ってしまった。もしこれが10年以上前であれば、私はこの職で成功しなかったはずである。しかし、1970年代後半から1980年代前半にかけて、フェミニスト地理学者が女性の地理学者とフェミニスト思想との橋渡しに努力した¹⁾。さらに、ポストモダニズムの流れを汲み、「差異」に関心が向けられ、1990年代には人文地理学の大部分の分野に浸透した「他者」の声が拾われた。それらの出来事の中で、私は大まかに「批判地理学」と呼ばれうるものに、知的で社会的な空間を見出したのである。

セクシュアルアイデンティティや研究・学問的アイデンティティの相互性は、肯定的で歓迎すべきものであり、強い支えとなる経験であった。しかし、その一方で、この相互的な関係によって、セクシュアルアイデンティティを中心とした学問的アイデンティティが固定されてしまった。私は、子どもや子育て、食べ物、そして最近では刑務所、男性性、障がいについて研究することで、自らの学問的アイデンティティを変化させようとした。しかし、私の初期の研究が作り上げたレズビアン地理学者というアイデンティティを揺るがすまでには至らなかった²⁾。

私は逆説的なポジションに押し付けられており、ときどき不快になることがある。私は、公的・私的の両方の場においてカミングアウトした「レズビアン地理学者」という周囲のイメージに縛られている。しかし、実際には家族に対してまったく異なるアイデンティティをパフォーマンスしているため、私は「公的」と「私的」、「仕事」と「家庭」で分断された非常に不安定な存在となっている。皮肉なことに、他の女性たちがこのような複数の主体性をどのように管理しているかを論文として書いたことが、私自身の人生を悪くさせている（例えば、Valentine 1993a, 1993b, 1993c, 1996aを参照）。

このことは以前まで重要ではなかったが、現在は違う。私が、研究—研究者—研究対象者における

相互の構築性に関するRose(1997)に影響を受けたのは、その論文を読んでいたとき（そして本稿執筆時点で）、ヘイトの手紙を受け取っていたからである。その多くは、私のセクシュアルアイデンティティや研究、教育、地理学の分野におけるポジションについて触れていた。

以下は、悪意ある同性愛嫌悪の手紙や無言電話を受け、留守番電話に脅迫のメッセージを残され、両親にアウトイングされた私の体験談である。本稿は、嫌がらせの地理学（geography of harassment）についての論文であり、私が今までに書いてきた「地理学」を半独立した観察者として再考する。今までは、恐怖や、性暴力、カミングアウトのナラティブ、レズビアンのアイデンティティ、そして「権力」について、他者の説明を「借りてきた」（例えば、Valentine 1989, 1993a）。しかし、今回はそれらの内容を、私自身の地理学のレンズを通して探求していく。「地理学」は私が経験した嫌がらせの制度的な枠組みであり、その経験が学問分野での私の地位と結びつき、私の人生に矛盾を生じさせ、ある程度まで私の「アイデンティティ」を作り変えた。そのため、私のセクシュアルアイデンティティや「家族」アイデンティティ、学問的アイデンティティ、研究、学問分野が、相互に関わりあって構築されることも非常に重要な要素となる。もちろん、考えが文章化されるとき言葉は意味を固定化し、複雑なものを単純にし、不確実なものを確実にする。特に、個人的な文章は、自己の統一を意味する傾向がある。それを避けたいと思っているが、私はいずれ間違いなくこの罠に陥る。

Stanley(1992: 246)は、自伝的著作(autobiographical writing)について論じる中で、*bio*（日常生活の重要な出来事の語り）が、*auto*（「自己」）と*graph*（「書く」）の両方を理論化し、理解するための重要な要素であると指摘している。そこで、この後に続くすべての事柄の参考になる、ある一連の重要な出来事の概要を説明したい。その語りを構築したうえで（もちろん、様々な伝え方がある中での一つの方法に過ぎないが）、私はこの経験をいくつかのテーマに沿って解釈していきたい。第一に、地理学の分野から私を排除しようとしたさまざまなプロセス（それらはすべて、学問的・性的な自己が相互に関わりあって作用する）を説明する。第二に、嫌がらせの地理学について考える。ここでは、ヘイトの手紙や無言電話が、どのように場所の意味を混乱させるか、とくに、個人の地理学は、それが侵害されるまで、いかに気にも留められていないかについて論じる。第三に、法の地理学を検討する。そして最後に、本稿の冒頭



図1 Letter 1

に立ち返り、研究—自己—地理学の相互構築性を考察する。

嫌がらせの内容

嫌がらせは1997年の夏からはじまり、私は無言電話に悩まされていた。その電話の発信者は、ブリティッシュテレコム^{訳注1}の「非通知番号」によって匿名が守られていた。当初は、自宅の留守番電話に必ず「沈黙」が残され、自宅と（あまり頻繁ではないが）職場の両方で電話がかかってきた。

そして秋になると、匿名の発信者は夕方に無言の電話をかけるだけでなく、夜中と早朝にも電話をかけることで、さらに嫌がらせをエスカレートさせた。私は睡眠不足を感じ始めたので、ブリティッシュテレコムのいたずら電話担当事務局に問い合わせ、どのような対処ができるかを調べた。対応した女性は電話番号を変更すると申し出たが、私の電話番号は電話帳で公開されていない。つまり、発信者は私のソーシャルネットワークの内部にいる人間であり、新しい電話番号を簡単に見つけることができるに違いないとわかっていた。そのため、電話番号を変更するという提案を受け入れる意味はなさそうだった。代わりに、私はできるだけ多くの友人や知人に、電話回線の履歴を調査していると伝えることにした。5カ月後に、嫌がらせの電話は止まった。それはクリスマスの時期で、私は嫌がらせの電話について、これ以上考えることはしなくなった。

1月のはじめ、週末に自分の誕生日を祝って過ごしたコーンウォールから、シェフィールドにノンス

トップで帰ってきた私は、疲れ切った状態で家のドアを通った。私は手紙を集め、いすに腰掛け、友人に電話するために受話器を取った。そして、受話器を肩とあごの間に挟み、バースデーレターを開き始めた。それを読んでいた私は、文章の途中で急に黙り、「なんてことだ」と言った。私宛て実家に郵送され、実家からシェフィールドの自宅に未開封で転送された封筒の中には、新聞の見出しを切り抜いた文字が書かれた白い紙が入っていた。そこには、「両親にお前が病気のレズビアンであると伝えてやる！」（図1）と書かれていた。

私は警察を呼び、その手紙は合計9通届いたヘイトの手紙のうちの1通目だと証明された³⁾。ヘイトの手紙は、図1のように新聞の見出しから切り抜いた短いメッセージもあれば、長文で書かれたものもある。それらはイギリスの六つの地域から投稿され、両親の住所、自宅の住所、私の部署に送られた。手紙にはそれぞれ異なる内容（私の性的指向、個人的な関係、研究、教育、大学院での指導など）があり、その一部には、私が地理学を「辞める」ことを強く求め、家族へのアウティングを脅しているものもあった。その内容は、加害者が私の専門的なネットワークと密接に関連した地理学分野の一員であることを示唆している。差出人は、個人であることを示唆するものもあれば、地理学界を「浄化」するためのネットワークの一部であることを示唆するものもある。それらの手紙とともに、散発的な夜間の無言電話が復活し、留守番電話に脅迫的な音声で録音され、深夜にドアベルが鳴るようになった。

私は1998年のアメリカ地理学会（AAG）のカンファレンスへ出発する直前、「次の手紙がどこに届

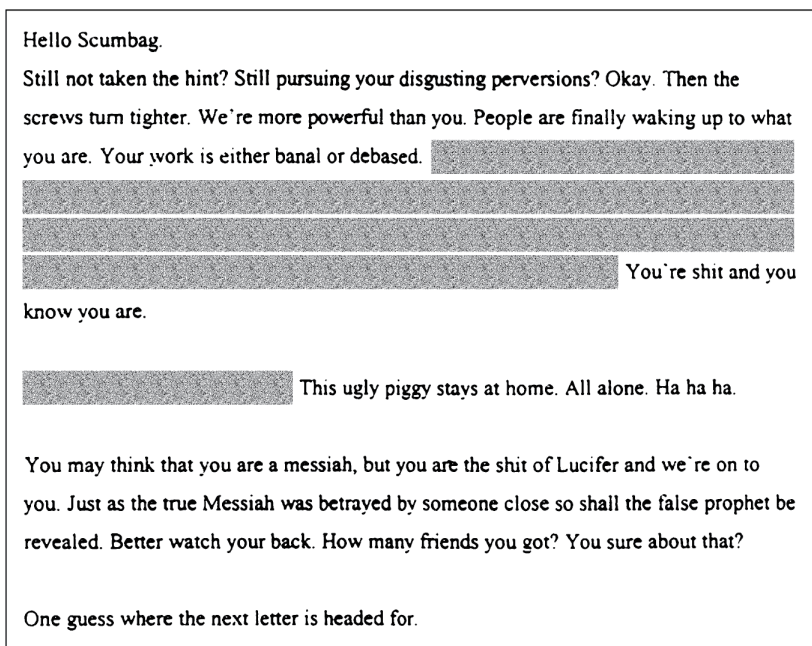


図2 Letter 4

Edited to remove personal references to other people.

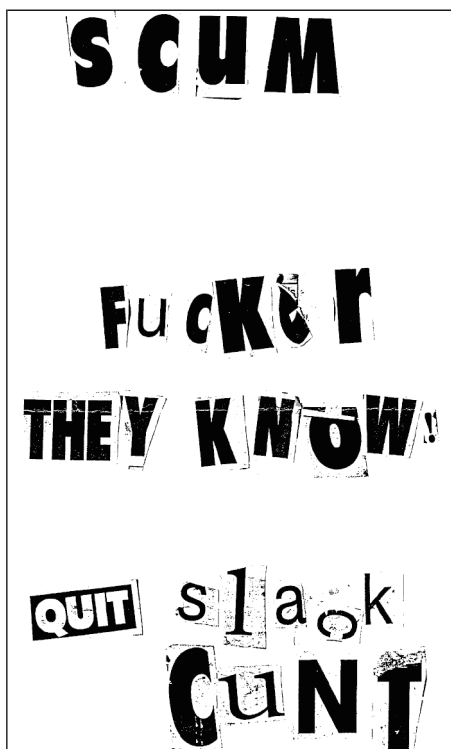


図3 Letter 6

Edited to remove personal references to other people.

くか想像するがいい」という遠回しな脅しで終わる手紙を受け取った（図2）。そして、カンファレンスから戻ったとき、別の手紙が届いていた。今回は「人間のクズ…愚か者、両親は知っているぞ！辞めろ、アバズレ女」（図3）。と書かれていた。そして、案の定、加害者はレズビアンの地理学に関する私の出版物のリストを不快な言葉を添えて、両親に送っていた⁴⁾。私は、この程度で嫌がらせが終わるよう願っていたが、本稿を執筆している時点で、さらなる誹謗中傷のメールを受け取っている。

排除のプロセス：地理学の境界とつながり

*Geographies of Exclusion*の中で、Sibley (1995)は心理分析と文化人類学の知見を用いて、自己と他者の構築および、これらのアイデンティティが社会的・物質的・文化的背景とどのように関連しているかを探求している。とくに、彼は自己と他者の境界について考える際に、クリステヴァの棄却 (abjection) という概念を援用している。クリステヴァは、主体は自分自身の残滓 (排泄物、腐敗、感染など) に反発を感じると指摘しており、それは「アイデンティティの外部からやって来る危機を表しており、自我は自我でないものによって、社会はその外部によっ

We know about you and your little lesbo 'friends', all about you. You are sinners, the lot of you. We've watched you manipulate your way into our ranks and its time now that someone puts a stop to it. We held court and decided you are the worst of a diseased, sick breed of deviants. You are a pollution [redacted]. You are rabid, beyond redemption and evil. You know now that we have networks. [redacted] may have brown-nosed the VC on your behalf but some of us here were delighted to get rid of you. People everywhere know you are sick and you are so despised that its not difficult to find people to give us information about you. We have associates in all places, including Sheffield, and we have information about you, your disgusting behaviour and your dirty little 'friends'. We know your movements and we're going to bring you down. Your repugnant behaviour has to be exposed for your own salvation. We'll no longer let the likes of you corrupt and pollute academia. We consider it our purpose to blow your little networks apart and drive the lot of you out. Take our advice and get lost.

図4 Letter 5

Edited to remove personal references to other people.

て、生は死によって脅かされる」(Kristeva 1982: 71, Sibley 1995: 8で引用された)。自己の純粋さを維持するためには、不純なものとの果てしない戦いの中で、常に肉体の境界を守らなければならない。Sibley (1995: 8) は、「清らかなものと汚れたもの、秩序と無秩序、「我々」と「他者」を分離しようという衝動、つまり忌避されるものを追い出すことが西洋文化において奨励されているが、そのような分離は決して達成できないので不安感を生み出している」と主張する。また、Sibley (1994: 14) は次のように続けている。

クリステヴァの「汚れを取り除く」もしくは「嫌悪から距離を置く」という単純な理論に従って内と外の境界を決めることは、階層が低い不完全さを表す身体的・社会的なイメージに変換される。排他的な議論では、とくに、色、病気、動物、性、自然といった要素が引き合いに出されるが、それらはすべて不完全さと劣位としての汚れという概念に帰着する。

この一貫した汚染のイメージは、5通目の悪意ある手紙(図4)を読むと明らかである。その排他的な言葉は、色彩以外の要素において学問内を「浄化」したいという書き手の気持ちを表している(太字は私による強調、下線は原文において加害者が強調した箇所)。

私たちはお前とお前の小さなレズビアン「友

人」について知っている。そして、お前のすべてを知っている。お前たちは罪人だ。お前が私たちの地位に狡猾に上り詰めていくのを見てきたが、それを止めさせる時が来た。私たちは裁判を開き、お前が病的で異常な逸脱者の中で、最悪な人間であると決めた。お前は公害だ。…狂気で救いようのない悪だ。私たちのネットワークについては、もう知っているだろう。[X教授]は、お前のことで副学長に媚びへつらったかもしれないが、私たちの何人かは、お前を排除することを喜んだ。誰もがお前を病気だと思っており、お前はひどく軽蔑されているので、情報を提供してくれる人間を見つけるのは難しくない。私たちはシェフィールドを含むあらゆる場所に仲間がおり、不愉快な行動や不潔で小さな「友人」についての情報を持っている。お前は私たちに行動を把握されており、失望する。お前の不快な行動は、お前自身を救済するために暴露されなければならない。私たちは、これ以上、お前のような人間が学問を墮落させ汚染することを許さない。私たちは、お前の小さなネットワークを破壊し、追い出すことを目的としている。私たちのアドバイスを受け入れ、消え去ってくれ。

病気や汚れに関する言葉はレター5に登場し、レター1、2、9(図1、5、9)にも使われている。それらは、同性愛が不完全という意味を示すだけでなく、感染するという脅威も含んでいるため、非常に強力なステレオタイプである。「病気の他者」は大多数の「正常者」を感染によって脅かし、最終的には崩壊させる。このようなイメージは、セクシュアルマイノリティやAIDSに関する現代の道徳的パニックにおい

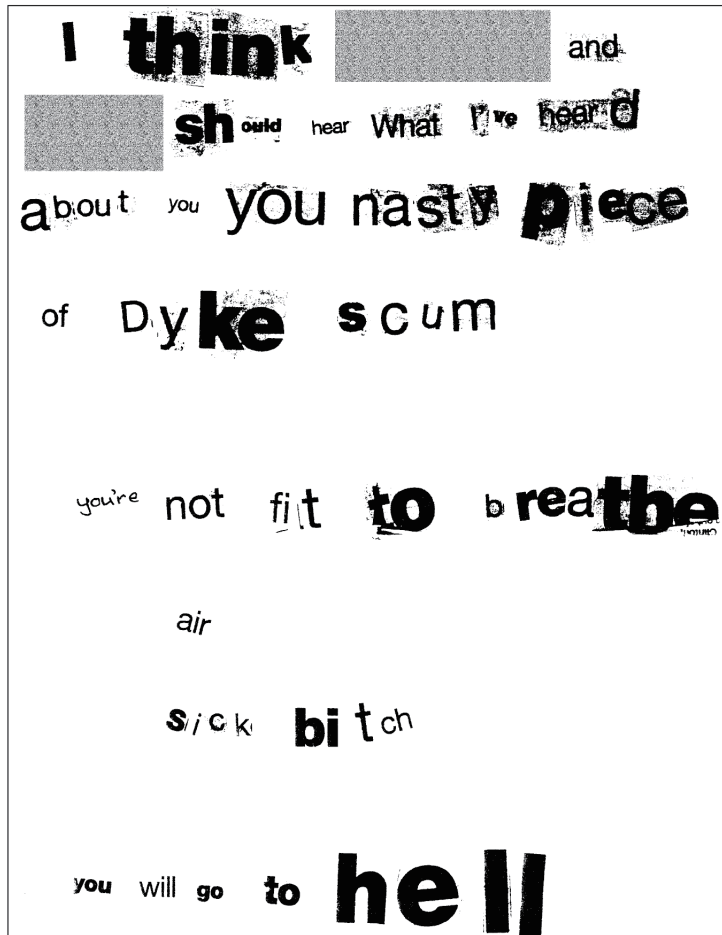


図5 Letter 2

Edited to remove personal references to other people.

て、もっとも明白である (Sibley 1995)。

レター 3 (図6) とレター 6 (図3) は、私の不完全さと劣位を示すため、性的にスティグマ化されたイメージを用いている。一方、レター 3 は私を「不感症なレズビアン」と非難し、レター 6 は、レター 3 と反対の「アバズレ女」というステレオタイプを用いている。

動物および自然 (繁殖や狂気) への言及は、レター 5 (上記) やレター 1、3、7、8 (図1, 6, 7, 8) で明確に記されている。私はこれらの手紙において、ブタ、ウシ、ナメクジと称される。Sibley (1995) は、動物が人間より劣っている (野蛮、非文明的) 存在として表現されるだけでなく、ブタやラットといった特定の種が残滓 (廃棄物、汚水など) と関連しているという意味で、動物は忌避される存在である指摘している。

このことは、3月にあったAAGのカンファレンスの直後に書かれたレター 7 (図7) の、以下の抜粋に最も顕著に表れている。「ところで、私たちはお前を見た。というより、通り過ぎたときに臭いがした。お前はブタのようであり**ブタのような臭い**がする。私たちはいつか**悪臭**を取り除く。それまでは、私たちはお前を見ている。まだ遅くはない。悔い改め、お前の**汚物**を私たちの喉に流し込むのをやめろ」(太字は私による強調)。このように、西洋文化において重要な価値を持つステレオタイプやイメージを用いることで、手紙は私を地理学から追い出すための排他的なディスコースとして機能する。そうすることで、その手紙は、地理学がレズビアンの私を歓迎しない異性愛者の空間であることを暗示している。

確かに、地理学には男性主義や異性愛主義、健全主義、植民地主義の負の遺産がある (McDowell

GILL VALENTINE:

STROPPY, MOODY, SELF-CENTRED, CAREERIST COW.

THIS IS WHAT YOUR COLLEAGUES AND STUDENTS AND
EVERYONE ELSE YOU HAVEN'T CONNED THINK OF YOU.

NASTY, UGLY, PRICK-TEASING, FRIGID DYKE.

WONDER WHAT YOUR PARENTS THINK OF THEIR LITTLE
DARLING? DO THEY KNOW WHAT THEY ARE RESPONSIBLE FOR?
THEY SHOULD.

図6 Letter 3

Oh dear. We have been a naughty girl, haven't we? Its amazing what people will tell you over a pint in a bar at a conference. Even your little lesbo 'friends' know what you are. And we know who they are, which makes this all the more entertaining. You have made it so easy for us. Its quite hilarious. We saw you, by the way. Or rather we smelled you as you walked past. You look like a pig and you smell like a pig. One day we'll get rid of the stench. In the meantime, we're watching you. Its still not too late to repent and stop pushing your filth down our throats.

図7 Letter 7

1990; Bell 1991; Rose 1993; Chouinard and Grant 1995; Binnie 1997)。地理学界には、非常に多くのセクシュアルマイノリティがいる (Bell 1994を参照)。しかし、Grant (1997) は「行方不明のレズビアン」や「見えないレズビアン」の難問を指摘している。このレズビアンの不可視性は、Johnson (1994: 110) が学問内でのカミングアウトについての不安を以下のように書いていることから説明できるだろう。彼女は「紙面上でカミングアウトし、自分のセクシュアリティを宣言し、レズビアンであることを踏まえてフェミニストの地理を構築することの (学術的もしくはその他の分野での) 結果について、私は何年も苦悩してきた。そして基本的には、同性愛嫌悪の文化や規律の中では、リスクが大きすぎると考えてきた」と述べている。

私は今までのキャリアの中で、同性愛嫌悪に関する小さなエピソードをいくつか経験してきた。例えば、学部の研究発表からレズビアンの地理学に関する私の研究を除外され、私の研究が税金の無駄遣いだと『ニュース・オブ・ザ・ワールド』で酷評された。さらに、大学の内部監査で他学部の審査員が、レズ

ビアンの地理学に関する私の論文を評価に含めるべきではないと示唆していたことや、ある地理学者が私のセクシュアリティを理由に、大学への着任に反対しようとしたこともあった⁵⁾。その都度、関係部局の同僚や「批判地理学」の仲間が支えてくれた。しかし、一部の事例はより強い恐怖を感じたこともあった。

このような負の遺産が地理学を支えていることを認識し、性差別や同性愛嫌悪、人種差別、健常主義が様々な分野に浸透していると理解しているが、私は地理学 (または、少なくとも私の興味関心がある分野) から排除されているとは感じてない⁶⁾。実際、本稿の序文で述べたように、私は特定の分野において積極的に受け入れられていると感じている。そのため、私はヘイトの手紙を受け取ったとき、学問内を浄化しようとする異性愛者の文章として読んだことはない。加害者は手紙をそのように読んでほしかったのだろうが、手紙の内容は、受け入れられていると感じた私の経験とかけ離れている。むしろ、その内容から、加害者が私の学問的なネットワークと密接に関係していることがわかる。それゆえ、批

CHIEF CHEER-LEADER OF THE DIKE
CAUCUS? CHIEF SLIME-BAG MORE
LIKE. HALF OF THAT BUNCH OF UGLY
DEVIANTS THINKS SO TOO

EVER POURED SALT ON A SLUG?

STAY OUT OF THE SEA THIS SUMMER

図 8 Letter 8

判地理学者が私を学問から排除したいという個人的な動機から、同性愛嫌悪のディスコースを利用して、この手紙を書いたと考えている。

しかし、たとえその手紙が地理学界全体ではなく、特定の誰かから出されたとしても、加害者に私の情報がコントロールされている以上、私はどのように自己の境界を守り、汚名の源を見つけ、そこから距離を置くことができるだろうか。悪意ある手紙の一部は、私の生活に関する情報が含まれているが、その情報は少数の人にしか知られるべきではない（そのため、本稿の資料は編集されている）。McNay (1994: 27) が述べているように、「知識は、抽象的で利害関係のない研究領域に属する純粋な考察の一形態ではない。むしろ、知識は権力関係の産物であり、その関係を維持するための道具である」。とくに、手紙の中で再生産される私の生活についての知識は、学問的なネットワークの産物である。そのネットワークの中で、電子メールのスレッドやカンファレンスバーでの会話、個人的な友情といったディスコースをやり取りしている地理学者のすべてが「話す」ことを通じて権力を行使している。レター 4、5、7(図2, 4, 7)の抜粋が示唆しているように、これらのネットワークを通して、私は見えない観察者から常に監視されている。

お前は救世主のつもりかもしれないが、実際はルシファーのクソだ。お前がやっていることはお見通しだ。本当の救世主が親しい人間によって裏切られたのと同じように、偽りの預言者が明らかにされる。気を付けたほうがいい。お前には何人の仲間がいる？ 本当にいるのか？ (レター 4)

…お前はひどく軽蔑されているので、情報を提

供してくれる人間を見つけるのは難しくない。私たちはシェフィールドを含むあらゆる場所に仲間がおり、不愉快な行動や不潔で小さな「友人」についての情報を持っている。お前は私たちに行動を把握されており、失望する。(レター 5)

カンファレンスバーでビールを飲んでいる人々が、お前に言っている内容は驚くべきものだ。小さなレズビアン「友人」さえ、お前が何者なのかを知っている。私たちは彼女たちのことを知っているのも、とても面白いことになっている。お前は私たちを楽にさせる。それはとても面白いものだ。(レター 7)

一方で、私は古典的なフーコー主義者の感覚で自己監視を行っている。自分が何をしているのか、どこで何をしているのか、教育や仕事、学生、人との関係性、家族について誰に何を話しているのかについて、注意深くなっている。一度学問的なネットワークの外に出しまうと、仕事で支えてくれているほかの地理学者と連絡を取ることができなくなる。しかし、仮にそうしても、加害者とのつながりがすべて断ち切れるわけではない。どのような学問であれ、自己充足的で自己言及的な性質を持っている。そのため、転職することで過去を完全に断ち切ることができない他のキャリアとは異なり、地理学における成功や失敗は死んだ皮膚のように残るので、自分の歴史を振り払うことは不可能である。私は自分の情報を残してきたため、それを地理学から消すことはできない。加害者は気兼ねなく私の過去を調べることができる。そして、地理学のソーシャルネットワークから、現在の生活だけでなく、特定の場所や部門との過去のつながりも知ることができる。そこにはレター 9 (図9) の抜粋が示すように、私の申請書の

I have some of your application forms in front of me. They have just about done the rounds now. People try to stop these things getting around, but they are actually very easy to get hold of. They are also very interesting. Extremely nauseating, but very interesting. It would all be quite amusing if it weren't so sick. Just the other day a few of us were chatting about what most sickens us about you. One person, who met you for the first time in Scotland recently, put his finger on it when he said his first thought on seeing you was "who the fuck does she think she is?" Yes, it's your arrogance that we find so galling. You seem to think that the shite you turn out is worthy. You are just a debased fucker, and the sooner you realise that the better for all of us. Has anyone told you about the web page? We just about have enough material now. It should be a scream. It will also show the world what you really are – a sick menace who shouldn't be allowed anywhere near kids. We'll be sending the address out soon. Don't worry, the fall from the cess pool you dwell in won't be too hard.

図9 Letter 9

コピーを入手することも含まれる。

お前の申請書をいくつか持っている。ちょうど今、回し読みを終えた。人々は、このようなものが出回るのを止めようとするが、実際にはとても簡単に手に入る。申請書の内容はとても興味深いものだ。ひどく吐き気がするが、とても興味深い。もし病気でなかったなら、とても楽しいだろうに。(レター9)

実際、嫌がらせの数々は、私の仕事に関する地理学と結びついており、以前働いたことのある場所や私のキャリアと関係のある場所から手紙を投函している。加害者は「場所」を利用することで、私と仕事上の関係がぎくしゃくしていた2人の地理学者が、手紙の差出人であるかのように仕立て上げたのだろう。

私は、ネットワークから孤立し疎外されればされるほど、有能な学者のアイデンティティを創造し、演じていくことができるという信念を持てなくなっていった。「棒や石は私の骨を折るかもしれないが、悪口は決して私を傷つけることはない(他人から嫌な言葉を言われても傷つく必要はない)」という古いことわざがある。しかし、次のレター3、4、9(図6, 2, 9)に書かれた非難を受けて、私はその非難が正しいのか間違っているのか、を明らかにする証拠を内省的に探している自分に気がついた。

ジル・バレンタイン

反抗的、気難しい、身勝手、出世主義の雌ウシ。これがお前の同僚や学生、その他すべての人が思っていることだ。汚らしい、醜い、性的魅力を利

用して男につけ込む女、不感症のレズビアン。(レター3)

どうも、卑劣な人間よ。まだヒントがわかっていないのか？まだおぞましい性倒錯が続けているのか？そうか、わかった。それなら、ねじをもっときつく締めてやる。私たちはお前よりも強力だ。人々はやつとお前の正体に気づいてきた。お前の仕事は陳腐か卑劣だ。…お前はクソだし、それは自分でわかっているだろ。(レター4)

そう、私たちはお前の傲慢さにうんざりしている。お前は自分のクソに価値があるとでも思っているようだ。お前はただの根性なしの愚か者であり、それに早く気づいたほうが、全員にとって良いことだ。(レター9)

このような嫌がらせと戦い、どのように対処するか苦労するにつれて、私は学問的な自信が失われ、集中力が低下した。さらに、執筆能力が鈍り、カンファレンスに出席する意欲が損なわれていると感じた⁸⁾。カンファレンスは「優秀な研究者」としての不安定なアイデンティティがパフォーマンスされてしまう場であり、さらに間違いなく加害者と同席する場であった。

このような経験は、私を逆説的な空間に置いた。私は三つの排他的なプロセスを通じて、地理学／地理学者から距離を置いている。第一に、手紙の中でネガティブなイメージが使われているのは、地理学／地理学者と私との間に境界線を引くためである。第二に、同僚や学者の友人から、自分の生活に関する情報を盗み出されないように、地理学のネッ

トワークから身を引くことを余儀なくされた。第三に、手紙は私の自信を低下させることでカンファレンスへの参加を妨害し、執筆能力を妨げることで、私の認知度を低めてしまった。その一方で、手紙は嫌がらせを相談した地理学者たちとのつながりを強め、そして深めてくれた。それによって、ある出来事でぎくしゃくしていた学問における関係性が修復に向かった。また、手紙は私が学際的ネットワークやソーシャルネットワークを発展させ、地理学という狭い世界から抜け出す動機となった。さらに、私は教育についてより自己再帰的になった。その結果、今年は学生からキャリアの中で最も高い評価点を受けた。そして、手紙によってふたたびセクシュアリティについて書く気になった（とくにレズビアンとゲイの若者のための経済社会研究委員会の助成金に応募しようと思った）。このように、加害者は私を地理学や学問の世界から追い出そうとした。しかし、逆説的ではあるが、加害者がそのような行動をとればとるほど、私は自分の学問的な関係性を機能させ、私が働く組織に受け入れられた。いささか使い古された空間的比喩を借りれば、この嫌がらせは逆説的に、私をプロジェクトの内側にも外側にも(再び)位置づけたのである。

個人の地理学と空間の意味：家・職場・身体・移動

3年前、私はリンダ・ジョンストンと一緒に、家庭内におけるレズビアンのアイデンティティのパフォーマンスと監視について執筆していた (Johnston and Valentine 1995)。その際、「ホーム」の領域に関する地理学的・社会的な論文を多く読んだ。私たちの章の中では、Sommerville (1992) の七つの重要な側面——シェルター、団欒(心身の健康)、心(愛情と思いやりのある社会関係)、プライバシー、ルーツ(アイデンティティと意味の源)、住居、楽園(日常生活とは異なる「理想」のホーム)——を取り入れた。これらの側面は、二つの実証研究(一方はイギリス、他方はニュージーランド)でインタビューしたレズビアンが、ホームに抱く複雑な意味を理解するために援用された。このとき、私は最初の家を買おうとしていた。私たちの章の中では、ホームに関する学問的研究がその肯定的な意味(団欒、心、プライバシー、ルーツ、楽園など)を特権化する傾向に異議を唱え、インタビューの一部が家で疎外と抑圧を経験していると指摘した。しかし、当時の

私は、Saunders (1989: 184) の「ホームは人々が舞台から離れ、監視されず身近な環境をコントロールできる場所である。それは、自分の城である。それは、自分が所属していると感じる場所である」という表現と同じ気持であった。

私は初めて自分の家を見たとき、一瞬で好きになった。他の家では、一人で過ごすに夜に不安を感じることもある。しかし、シェフィールドの家の場合、まだカーペットや家具がないにもかかわらず、私は引っ越してきたその日から常に安全性や安心感を持っていた。自分の家はシェルター、団欒、セキュリティを提供しただけでなく、絶対的なプライバシーの感覚も与えた。それは私にとって初めての感覚であった。以前は、常に誰か(両親、同居人、大家、パートナー)と一緒に住んでおり、そのような空間は、結局は制限された空間であった。

最初の家は家具や絵画などを通して、自分の空間を作り出す初めての機会だった。Silverstone *et al.* (1992: 19-20) は、家庭の道徳経済について以下のよう

モノと意味は、家庭生活の空間と実践の中で対象化され組み込まれる。そして、両者は、商品とはかない道具的な関係という公的世界で提供されるものと関連しながら、家庭のための意味世界を定義する。しかし、それらは道徳的なプロジェクトを通して行われる。その結果、空間的・時間的に拘束された安心感や信頼感が生まれる。そして、その安心感や信頼感なしには(実際にどんな)生活も成り立たなくなる。

それゆえ、家は私のために存在している。しかし、絵画やステレオ、電話、郵便受けは、個人の経済的意味のみで利用されない。私は成人してから多くの引っ越しを経験してきた。そのため、従来のソーシャルネットワークを越えて、全国津々浦々、友人を増やしてきた。家の電話と郵便受けは、人と人とのつながりの象徴であり、友情という文化的な楽しみを媒介する道具である。私は、常に郵便受けを確認することから1日を始めており、電話の領収書には、ボブ・ホスキンス^{訳注2}の「話すことはいいことだ(it's good to talk)」というブリティッシュテレコム^{注2}の宣伝文句を具現化した金額が書かれている。

このような有意義な空間は、多かれ少なかれ、不浸透性を持ち、境界があり、安全な環境で、完全にコントロールできると考えていた。しかし、そのような空間に、ヘイトの手紙や電話、夜間の妨害が

侵入し、家庭生活を大きく乱した。Giddens (1989: 287) は、「存在論的安心 (ontological security)」を「ありのままである世界に対する信頼または信用の感覚」と定義している。しかし、私の世界はそのようなものではなかった。単純な物体(封筒)、日常的な音(電話の呼び出し音)は、新たな意味や脅威に満ちた強力な意味を持つようになった。Cresswell(1996) は、*In Place/Out of Place*の中で、(規範的な景観を持つ)場所において、私たちはどのように行動するべきかという考えを持つと指摘している。そして、その規範性は逸脱(transgression)が行われて初めて明らかになる。クレスウェルは著書の中で、グリーンナム・コモン・ウィメンズ・ピース・キャンプ^{訳注3}やニューヨーク市の落書き、ストーンヘンジ・フェスティバル^{訳注4}などを事例に挙げている。これらの事例は、個人や集団が「既存の場所を(誤って)利用・流用し、不可視な境界を超えることによって、「世間の規範」にいかん疑問を投げかけ、抵抗するか」(Cresswell 1996: 175)を示している。さらに彼は、それぞれの事例研究を通して、逸脱行為がいかに既存の景観に疑問を呈し、代替的な景観の存在をほめめかすかについても、触れている。彼は、「確立された社会地理的な境界を越えることは、現状を打破するので、衝撃的に見える。それはグロテスクで驚異的だと認識されている」(Cresswell 1996: 176)と主張している。

私はクレスウェルのこの著書が好きである。私は異性愛的な日常の空間が当然のように形成されていることに対して、レズビアンやゲイがいかにその空間を乱すことができるかを考えてきた。そして、そのために、「逸脱」という概念を用いてきた(Bell et al. 1994; Bell and Valentine 1995; Valentine 1996b)。私の頭の中では、レズビアンの復讐者たちがロンドンの主要な商店街の窓ガラスに侵入し、「デザイナーダイク^{訳注5}」、「レズビアンボーイ」、「ファンキーフェム^{訳注6}」といったラベルを付けたマネキンの横でポーズをとっている光景が浮かび上がった。その光景を思い描きながら、逸脱はとても遊び心のある概念だと思えた⁹⁾。しかし、私は突然ユーモアのセンスを失った。なぜなら、自分の場所での行動(「規範的な景観」や自宅や近隣で当然とされている信念と習慣)に関する期待が、侵害されたからだ。誰かが、嫌がらせの一線を越えたのである。私はもはや、近隣の空間的なテクストをどのように認識し、どのように反応すればよいかわからない。レズビアンに対するインタビューから、同性愛嫌悪による嫌がらせで、糞便を郵便受けに入れられ、車に酸性の物質をかけ

られるなどといった行為があることは、十分に承知していた。早朝に家の外に誰かがいたことが2回あった。午前4時に誰かが玄関のベルを鳴らした。ある夜遅くにかかってきた無言電話は、自宅近くの電話ボックスからかけられていた。身の周りに起こるあらゆる変化、つまり嫌がらせをした相手がそこにいたという手がかりに対して、私の意識は高まっている。自宅の空間が侵害される前には気づかなかった小さくても重要な痕跡が、新しい意味を持つようになった。ガレージのドアの傷はどこで付いたのか？傷は以前からそこにあったのか？裏庭に通じる路地になぜマッチが落ちているのか？そのマッチは隣人が火をつけ損ねて捨てたものなのか？それとも、加害者からの脅迫と理解すべきなのか？早朝に聞こえる車のエンジンはタクシーなのか？それとも、監視しているストーカーなのか？自宅周辺において、私は何が「場にふさわしい (in place)」で、何が「場違い (out of place)」なのか、もはや区別できない。友人たちは、加害者は手紙を送る以上の「暴力」行為に及ぶことのできない臆病者だと言って、私を安心させようとしてくれる。しかし、直接的な暴力へと嫌がらせが発展する可能性は、常にあると思っている。なぜなら、ほとんどの手紙には、身体的な危害を加えるという暗示的な脅しがかかっている。

お前という人間、つまりお前が汚らしいクズのレズビアンだということは、[X]と[Y] (両親)も知るべきだ。お前に空気を吸う資格はないんだよ、病気のビッチめ。地獄へ落ちろ。(レター 2)

ナメクジに塩を塗ったらどうなると思う？この夏は海に出てくるな。(レター 8)

私は自宅の意味と安全だけでなく、職場の意味も脅かされている。この空間にも手紙が侵入してきた。休みを取るための言い訳ではなく、朝と午後の郵便物の到着が不安の種になっている。前節で述べたように、職場(バーチャルワークスペースを含む)は、私がコントロールできる安全な空間から、不確実で予測不可能で驚異的な世界へと変化した。

誰かからウェブページについて聞いたか？私たちは十分な材料を持っている。きっと悲鳴を上げるだろう。お前の本当の姿、つまり子どもは近づいてはいけない脅威で病的なお前のことを、ウェブページで世間に知らしめてやる。すぐにそのアドレスを送ってやる。心配するな、不潔なところ

からお前が落下するのは、それほど難しいことではない。(レター9)

これには生理的な側面もあり、手紙は、私の汚染に対する不安や加害者が私のアイデンティティの境界を脅かす存在であることを示している。レター8(図8)を開いたとき、私は急にえづき窒息しそうになった。それ以来、ストレスを感じると、吐き気が再発する。のどは身体の内部と外部を分ける場である。吐き気は、のどを通して体内から手紙による毒を外に排出しようとするかのようである¹⁰⁾。

このように、手紙は私の重要な空間(身体、自宅、両親の家、近隣、職場と学問のコミュニティ)のほとんどを侵害した。そうすることで、私の安心感や幸福感、複数の主体性が、いかにこれらの空間に固定されているかを理解できた。そして、私はいかに個人の地理学を持っていたか、侵害されるまで、いかにそれらを当然視してきたかが浮き彫りとなった。今では、これらすべての空間が侵害される、もしくは侵害されている可能性がある。そのため、嫌がらせから逃れることはできない。電話番号を変更するような手軽さで、自宅や両親の住所、職場を変更することはできないのである。私は、これらの空間の境界を守ることができない。住所は私たちを空間に位置付けるものであり、より正確には、私たちの居場所を特定するものである。それゆえ、住所は私たちを脆弱にする。もはや、自宅では感情と身体の健康、プライバシーセキュリティなどを感じられない。その代わり、今では移動するときに平和を感じている。週末はもちろん、フィールドワークの講義でさえも聖域となっている。移動中は侵入も侵害もされない。

「空間」は、嫌がらせがいかに、そしてなぜこれほどまでに強力で効果的であったかを理解する鍵であるように思われる。

この事実を認識したことで、皮肉にも加害者が手紙を書く意図と、それが実際に生み出した効果との間に、大きな逆説があることがわかった。加害者はレズビアン——性的自己——のアイデンティティを利用して、地理学者—学問的自己—のアイデンティティを傷つけようとしてきた。しかし、私はこの嫌がらせの経験を理解しようとすることで、個人の地理学について考えるようになった。その結果、空間の学問としての地理学の重要性と、地理学者としての私の学問的アイデンティティを確固たるものにした。このように、地理学と私の複数の主体性は、表裏一体のものとして構築されているもしくは、互い

に結びついているようだ。

反撃：法の地理学

最初の手紙を受け取ったとき、2人の友人にどうすればよいかアドバイスを求めた。2人ともすぐに警察を呼ぶべきだと強く主張していたが、私は躊躇した。

Chouinard (1994: 426) は、法に関する地理学的研究をレビューし、Blomley (1989) が多様なコミュニティで起こる解釈プロセスとして、法という概念を提唱したと指摘している。また、シュイナードは、人間の法的な主体としてのポジションや法制度の内外で行動する能力を形成するプロセスについて、考える必要があると主張する。そうすることで、エンパワメントとディスエンパワメントの議論をする際、公的な場(例えば裁判所)におけるディスコースの解釈プロセスを重要なものとするに、彼女は異議を唱えている。そもそも多くの人が、これらの公的な場にアクセスできていない。そのため、彼女が指摘するように、このアプローチでは法的な権力の行使と経験が、日常生活の複雑な関係性や多様なディスコースと闘争の条件に、どのように組み込まれているかを理解することができない。これらの点を指摘したシュイナードは、Kobayashi (1990) を要約し、「法の制定や解釈、執行のプロセスは、必ずしも明らかではないが、特定の生活様式や闘争の物質的条件、生きられた社会関係の中に根差している。そして、それらはある集団や特定の声をエンパワメントするが、その他の集団は疎外や抑圧、沈黙を強いられる」(Chouinard 1994: 427)。

私は女性の恐怖やレズビアンに関する研究から、以下のようなことを理解できた。法は不平等と抑圧の関係(例えば、家父長制や異性愛)の中で生み出されており、このような社会関係に関連する仮定と実践を組み込んでいる (Smart 1989)。アメリカ国内では、雇用や住居、その他のサービスの性的指向にもとづいた差別が、少数の州および地方自治体を除いて、合法であるという事実を明らかにしている (Herek 1992)。さらに、「ゲイとレズビアンは…大部分が法の範囲外である」(Herek 1992: 91)。驚くことではないが、多くの調査 (Comstock 1989; Gross *et al.* 1988) は、ヘイトクライムがほとんど報道されていないことを示唆している。なぜなら、レズビアンとゲイは、警察が同性愛を嫌悪していると考えているからであり、もし自分に関連する裁判が

起きれば、セクシュアリティが公にされてしまうことを恐れているからである。一例をあげると、von Schulthess (1992) は、セクシュアリティが原因で被害を受けた226人のレズビアンのうち、わずか15人しか警察に通報しなかったと指摘する。また、自らの経験を報告したレズビアンやゲイの多くが、二次被害に遭うこともよく知られている (Berrill and Her-ek 1992)。これらの被害は、ヘイトクライムの被害者に対して無関心もしくは敵対的な裁判所やメディアによって引き起こされている。

このような研究を踏まえれば、嫌がらせに対する私の訴えが、サウスヨークシャー警察に受理してもらえるかどうかかわからない。そして、仮に受理された場合でも、そのあとで二次被害が生じるかもしれない。これらは、研究者としてのポジションから生じた意識である。そして、レズビアンとしてのポジションからは、1988年の第28条^{訳注7}に対する反対デモの際に、警察がセクシュアルマイノリティにどのような態度をとるかを直接目撃していたため、当然のことながら、告訴を考えることすらできず、訴訟を通じて両親にアウトティングされることを恐れた(その後、加害者が両親にアウトティングしたため、その恐れはなくなったが)。一方、中流階級の白人として法を遵守するというポジションからは、「正しいこと」を行うことが重要であり、私は正義を手に入れることができると強く信じていた。私は学者として、レズビアンとして、白人の中流階級の女性として、現在の法を複雑に理解してきた。そのような法の理解と法に関する数々の経験とが組み合わさることで、私は非常に矛盾した法的な主体として存在している。それと同時に、矛盾した法的な主体である私は、法体系の中で、あるいは法体系に抵抗する形で異なる立場をとっている (MacKinnon 1989; Chouinard 1994)。

私は悩んだ末に、警察に電話した。当初は強くエンパワーメントされた。訪ねてきた警察官がレズビアンだと判明したとき、法制度が異性愛主義的だというステレオタイプは覆された。これは内と外の境界が、結局はつながることを理解した一事例である。彼女は私に同情し、この事件がうまく収まるだろうと楽観的であった。

ヘイトの手紙は指紋採取のために押収され、紙から調べるのは困難だったが、(うんざりしながら待ち続けること数カ月) いくつか役に立つ指紋が発見された。ただし、これらの指紋は、まだ容疑者の指紋と比較されていない。1997年に成立したハラスメント防止法にもとづけば、悪意ある手紙は最長5年

の懲役と無制限の罰金が科される可能性がある¹¹⁾。この嫌がらせは、通信法(1988年)や個人に対する暴行の罪(1861年)など、他の法ではより軽い犯罪としても扱われる。無言電話は、電気通信法(1984年)の違反行為である。実際、電話や無言電話によって被害者が重大な心理的症状を有する場合、その行為は身体的な暴行になりうると裁判所は判断している。興味深いことに、地理的な観点からみると、物理的に離れている人間同士の「遠距離」の電話が、暴力になる可能性を提起している。

身体的な暴行の定義は、必ずしも身体が存在にもとづいているわけではない、つまり主体性は身体と物理的・物質的に結びついていない。しかし、何が逮捕の根拠となるかを定めるうえでは、容疑者の物質的なものが重要になってくる。私のソーシャルネットワーク内の地理学者が、嫌がらせを行ったという状況証拠があるにもかかわらず、警察は逮捕する前に、その行為に関する物質的な証拠かその痕跡(例えば指紋)を見つける必要がある。

当初、私は警察の対応に励まされ、はっきりとした指紋を得る機会を増やすために、別の手紙が届くことを望んでいた。しかし、指紋採取が長引き、警察は捜査の進捗状況を報告してくれず、メールがますます悪質に満ちるようになっていくにつれて、徐々に私の自制心や楽観的な見方は弱くなった¹²⁾。

法制度は、原告に「救い」や「正義」が存在すると信じ込ませる。その一方で、私はこの経験から、最終的に自分を奮い立たせるのは自分自身であることを学んだ。女性の暴力への恐怖に関する博士論文を執筆していたとき、私は恐怖に関する心理学についての多くの論文 (Glass and Singer 1972; Rachman 1978) を読んだ。これらの論文によると、恐怖の根本的な原因は無力感と自制心の欠如にあるという。そして、うつ病になり、死に至ることもある。逆に、たとえごくわずかであっても、自制心を持ち自発的であれば、無力感と恐怖のサイクルを断ち切ることができるという。このことを念頭に、現在子どもたちのウェブ利用について研究している私は、嫌がらせを受けたときの対処法をインターネットで調べるようになった。これは、グローバルがローカルに情報を提供する事例といえるかもしれない。そもそも、私が本稿を執筆し始めたのも、無力感に対抗するためであった。このように、冒頭で用いたローズの引用を言い換えると、私の地理学的研究と自己は「双方向のテキスト」 (Rose 1997: 316) となった。

めでたし、めでたし？

本稿は、私が経験した出来事を通じて、嫌がらせを受けることの意味を地理学的に説明しようとした。私は、ヘイトの手紙や無言電話が、いかに日常生活において重要な空間のほとんどの侵入してきたかを探求した。そして、その中で、存在論的な安心感に対する個人の地理学的重要性だけでなく、そのような経験を理解する手助けとなる、学問分野としての地理学の価値を認識するようになった。とくに、個人の地理学が侵害されるまでは、それをどれだけ当然視してきたかについても理解するようになった。そして、これらのことから、私の地理学者としての学問的アイデンティティが再確認された。

これらの経験によって、私の主体性がいかに形成されてきたかを理解するには、嫌がらせを受ける前の私 (Gill-then) と現在の私 (Gill-now) について考える必要がある。カミングアウトは、クローゼットから外に出るという1回限りの選択であると語られることが多い。しかし、実際、カミングアウトはより複雑で厄介な継続のプロセスである。両親にアウトイングされる前や、本稿を執筆する前には、不確かでよくわからない存在であった。私は地理学界ではカミングアウトしたレズビアンだと思われていたが、実際にはかなりクローゼットであった。家族は私のことを異性愛者だと思っていたが、世間はカミングアウトしたレズビアンだと思っていた(実際、最近の『ゲイ・タイムズ』はディヴィッド・ベルと私を、イギリスで最も影響力のあるゲイとレズビアン100人のリストに加えた!)。私は、ビル・クリントンの「聞くな、言うな (don't ask, don't tell) ^{訳注8}」というアメリカの軍事政策を体現していた。私は空間と時間を隔てて、自分のアイデンティティと異なるパフォーマンスを続けることで、これらの矛盾を解決することができた。しかし、この厄介な矛盾は、私を脆弱な状況に追い込んだ。私が経験した悲惨な嫌がらせは、両親へのアウトイングとなり、地理学界への正式なカミングアウトを「鼓舞」した。そしてこれらのことは、非常に不安定ではあったが、(とくに、父親がインターネットで私のホームページを探し始めたとき) いくつかの境界を破壊させた。その前までは、私は、家庭と仕事、個人と政治、プライベートとパブリックの境界を注意深く保ってきた。しかし、結果的には、レズビアンである自己や、学問的な自己、家族としての自己そして私の研究の間に存在する矛盾のいくつかは、崩壊した。

そして、この嫌がらせは、レズビアンというセク

シュアルアイデンティティがいかに私の研究を作り上げ、研究がいかに学問的アイデンティティを形成したかを明らかにした。逆に、家族に私のセクシュアルアイデンティティを想像させるため、加害者は私の研究と学問的アイデンティティを効果的に利用した。つまり、私の学問的アイデンティティであるレズビアンの地理学の論文リストを両親に送ることで、アウトイングしたのである。このように、セクシュアルアイデンティティと地理学の研究・執筆、研究者としてのアイデンティティは、交互に関わりあって構築されていた。

本稿での「カミングアウト」によって、私はセクシュアリティを公表したレズビアン地理学者のアイデンティティを確立し、複数の主体性を一時的に確かなものにしていく。ただし、現在の私が「当時」(不確かでよくわからない存在だったとき) よりも、確立され首尾一貫した自己であるという訳ではない。「カミングアウトストーリー」(例えば、Penelope and Wolfe 1980; Hall Carpenter Archives/Lesbian Oral History Group 1989) に対する批判もある。その一つは、セクシュアルアイデンティティを認識することで、理解できなかった事故を突然理解でき、より良い本当の自己が生まれるものとして、肯定的にストーリーが語られることへの批判である (Martin 1988; Stanley 1992)。本稿を通じた自身のカミングアウトが、肯定的なストーリーとして読まれることを、私は望まない。確かに、私は、レズビアン地理学者のアイデンティティを一時的に確かなものにした。しかし、そのことが、冒頭で引用したGibson-Graham (1994) の言葉を借りれば、私が依然として中心を持たず、不明確かつ不確実であり、複雑で分裂しており、完全には説明できない存在であるという事実を、覆い隠すことがないようにしたい。私はMiller(1991: x)が名付けた「とあるものとして語ること (speaking as a)」や「代弁 (speaking for)」というような、「代表性 (representativity)」のポジションを好まない。彼女は次のように説明する。

私がユダヤ人であるということが、常に「ユダヤ人として (as a Jew)」語りたいと思い、「ユダヤ人として」語られたいと思うことを意味していただろうか? 手短かに言えば、そうではない。私はアイデンティティのレトリックを仮定する方法を見つけられなかった (私は「ユダヤ人フェミニスト」だと主張することはできない)。「ユダヤ人フェミニスト」は、世界における私の行動の根拠でもなければ、私の政治や文章を保証するものでもない。しかし、ユダ

ヤ人でありフェミニストであるという事実は、書き手としての私の自己意識を構成する重要な要素となっている。もちろん、その意味では、時に私の自伝のプロジェクトにも影響を与えている。…このような場合、語りは必然的に空間に位置付けられている。それは、実践や制度的な生活における社会的空間の中で、理論に何が起こるかである。(Miller 1991: 97) (原文ママ)

もし、本稿に結論があるとなれば、権力が行使されたとき（この場合は、無言電話やヘイトの手紙）、単一ではなく複数の意図しない（矛盾さえする）結果が生じる可能性があることを、私の経験は示している。確かに、私の経験は非常に苦痛でトラウマを生む破壊的なものである。そのため、私は家庭生活や家族、仕事、健康、幸福に与えた悪影響を軽視したくはない。しかし、同時に、加害者からすれば、私は手紙の内容を読んで、自分が地理学界から排除されていると理解しなくてはならなかった。また、例えば両親が私と絶縁するなどといったように、他の人々は加害者の意図した通りに、反応しなかった。しかし、私はそのような加害者の意図に反して行動した。例えば、嫌がらせを適切な機関や当局に報告し、同僚や友人からの支援を求め、本稿を執筆して自分の経験を解き明かそうとした。そうすることで、私には新しいつながりや誠実性を築き上げ、セクシュアリティに関する仕事を再開させた。また、私は地理学の分野で、より受け入れられるようになったと感じている。今回の嫌がらせこそが、私の個人的・学問的なポジションを何にもまして強めたのだと理解してもらえれば、加害者からの攻撃に終止符を打つことができるかもしれない。

謝辞

私は、昨年、2人のサラ、アリ、ジョーン、デボラ、ローラから返しきれないほどの友情や忠誠、支援を受けた。大きすぎるこの恩に報いることは、一生かかってもできないだろう。アニー、グレゴール、リズ、ナイジェル、カーラ、ジョン、2人のアンディ、トルードも、私が精神の安定を保つのに重要な役割を果たしてくれた。

サウスヨークシャー警察とシェフィールド大学人事部の様々なメンバーは、効果的だったかどうかは別として、私に寛容に対する信頼を回復させてくれた。そのことに感謝の意を表する。アリストアー、ベン、パット、レイク、アンドリュースは、地域コミュニティの存在についての私の学問的な懐疑を否定してくれた。心から感謝している。

本稿を執筆するにあたって、私は自分のキャリアを振り返っ

た。そして、キャリアを通じて、多くの地理学者が、私に励ましやアドバイス、仕事の紹介などの面でサポートしてくれた。デイブ・トーマス、ソフィア・ボウルビー、ピーター・ディッケン、ドリー・マッシー、リンダ・マクドウェル、イアン・ゴードン、クリス・フィロ、シンディ・カッツ、スチュアート・エイトケン、ジェネット・タウンセンド、マイク・ブラッドフォード、イアン・シモンズ、リチャード・マントン、ロブ・ファーガソン、グウィン・ロウリー、ピータ・スミッソン、ハーベイ・アームストロング、ピーター・ジャクソンに、この場を借りて感謝したい。

私の自信がなくなったとき、多くの学者や学生から受けた、研究や教育についてのやさしい言葉（と行動）が、絶望から救ってくれた（本人たちはそんな大それたことをしたとも思っていないだろう）。とくに、ピーター・テイラー、デイブ・マトレス、ヘスター・パール、アリソン・ジェームズ、ジニー・モロー、デイビッド・バックingham、トリスタン・パーマー、キム・ヴァン・エイク、レイチェル・パローズ、トム・デルフ・ジャヌレク、ジェネット・エルスデンに感謝したい。

リズ・ボンディ、サラ・ホロウェイ、アリ・グラント、ロン・マーティンの各氏が、本稿の草稿にコメントしてくれたことに対して、非常に感謝している。ただし、本稿の最終的な内容とそこに含まれている誤りについての責任は、私にある。また、図の複製に協力してくれたグラハム・アルサップとジョディ・ゴードンにも感謝したい。最後に、再びではあるがリンダ・マクドウェルへ。彼女は原稿に対するコメントだけでなく、ワイリー・ブラックウェルの*Antipode*のチーム（アン・ジョーンズ、ベッキー・ケニソン、マーサ・サリバン）と共に、この論文の出版に関して繊細に扱ってくれた。彼女には、大きな感謝の意を表したい。

原注

- 1) 最も注目すべきは、Women and Geography Study Groupが1984年に発表した*Gender and Geography*への寄稿者たちである。
- 2) 興味深いことに、学部生は私の研究とセクシュアルアイデンティティが相互に関係しているとは考えていない。最近のフィールドワークに関する講義で何人かの学生とパブにいた際、学生たちは私がDavid Bellと共同編集した*Mapping Desire*（セクシュアリティの地理学に、社会地理学の核となる要素で使われる書籍）について話し始めた。すると、突然、一人の学生が「個人的なことをお聞きしても構いませんか」と聞いてきたので、避けられないと思われる質問（私のセクシュアリティに関する質問）に覚悟を決めたが、結局スタッフの自然地理学のメンバーを「好いている」かどうかを聞かれた。
- 3) 本稿に掲載したヘイトの手紙は、原本をコピーし個人情報報を削除するために、一部編集している。原本は、サウスヨークシャー警察が証拠として保管している。
- 4) 女優のエレン・デジェネレスがアメリカのテレビ番組で、レズビアンとして出演することが発表されると、北

米のレズビアン・ゲイの団体は、当事者にエレンと一緒にカミングアウトすることを奨励するキャンペーンを始めた。当時、私はもしそのエピソードがイギリスで放送されたら、思い切ってエレンと共演するかもしれないと冗談を言っていた。皮肉なことに、エレンのエピソードが実際にイギリスで放送されたまさにその週に、加害者は両親にアウトティングした（北米での放送から約1年後）。

- 5) この嫌がらせをした人は、今回の出来事には関与していない。
- 6) Sexuality and Space Networkのメンバーで、このように認識してない人達に対しては謝罪する。
- 7) 私は、その人たちが手紙と何の関連もないことを確信している。
- 8) この嫌がらせを受けている間、私はいくつかの締め切りを守れなかった。様々な編集者たちが、私の謝罪を受け入れてくれたことに感謝し、なぜ私の作業が非効率的であったのかについて、本稿の内容がその部分的な説明となっていることを願う。
- 9) しかし、逸脱の概念を効果的に使ったクレスウェルや他の人々が、私のような方法でこの概念を使用しているのではない。
- 10) 私は不眠症や悪夢にも悩まされている。
- 11) 読者の誰かが、封筒に私への宛名書きや、別の場所から私宛の手紙を投函するよう依頼され、その依頼をおそらく悪ふざけの一種だと錯覚していた人がいれば、G.Valentine@sheffield.ac.ukまで内密に連絡していただきたい。また、本稿の内容と合致するような、私の生活に異常なほどに関心を寄せている人や、私についての質問や過度な話し合いをしている人、私の人間関係や仕事について中傷的な内容を広めている人がいれば、情報を提供していただけるとありがたい。
- 12) 本稿を書いている時点で、調査はまだ進行中である。

訳注

- 訳注1 イギリスの大手電気通信事業者
- 訳注2 イギリスの俳優
- 訳注3 イギリスのグリーンナム・コモン空軍基地への巡航ミサイル配備に反対するため、1981年から基地周辺で展開した女性の平和キャンプのことを指す。
- 訳注4 1974年にウォーリー・ホープによって開催されたフリーフェスティバルである。このフェスティバルの参加者は、マスコミによってヒッピーだとラベリングされた。参加者は公然と麻薬の販売・使用しており、警察との一時的な緊張関係にあった。
- 訳注5 ダイクとは、欧米において、主に男性らしい見た目をしたレズビアンに使われる蔑称である。日本においては、一般的に用いられない。
- 訳注6 フェムとは、主に女性らしい見た目をしたレズビアンに対して使われる名称である。
- 訳注7 第28条は、地方自治体による同性愛の促進を禁止

する内容であり、1988年5月に制定された。同法は2000年にスコットランドで、2003年にその他の地域で廃止された。

訳注8

レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルであることを隠していれば、アメリカ軍への入隊が可能である一方で、それらのセクシュアリティを認めた場合は除隊となっていた。この政策は1994年から2011年まで続いた。

資料訳

図1 レター 1 両親にお前が病気のレズビアンであると伝えてやる！

図2 レター 4 どうも、卑劣な人間よ。
まだヒントがわかっていないのか？まだおぞましい性倒錯を続けているのか？そうか、わかった。それなら、ねじをもっときつく締めてやる。私たちはお前よりも強力だ。人々はやっとお前の正体に気づいてきた。お前の仕事は陳腐か卑劣だ。…お前はクソだし、それは自分でわかっているだろう。

…この醜いブタは家にいて、ずっと孤独だよ。ハッハッハ。

お前は救世主のつもりかもしれないが、実際はルシファーのクソだ。お前がやっていることはお見通しだ。本当の救世主が親しい人間によって裏切られたのと同じように、偽りの預言者が明らかにされる。気を付けたほうがいい。お前には何人の仲間がいる？本当にいるのか？

次の手紙がどこに届くか想像するがいい

図3 レター 6 人間のクズ
愚か者、両親は知っているぞ！
辞めろ、アバズレ女

図4 レター 5 私たちはお前とお前の小さなレズビアン「友人」について知っている。そして、お前のすべてを知っている。お前たちは罪人だ。お前が私たちの地位に狡猾に上り詰めていくのを見てきたが、それを止めさせる時が来た。私たちは裁判を開き、お前が病的で異常な逸脱者の中で、最悪な人間であると決めた。お前は公害だ。…狂気で救いようのない悪だ。私たちのネットワークについては、もう知っているだろう。…は、お前のことで副学長に媚びへつらったかもしれないが、私たちの何人かは、お前を排除することを喜んだ。誰もがお前を病気だと思っ

ており、お前はひどく軽蔑されているので、情報を提供してくれる人間を見つけるのは難しい。私たちはシェフィールドを含むあらゆる場所に仲間があり、不愉快な行動や不潔で小さな「友人」についての情報を持っている。お前は私たちに行動を把握されており、失望する。お前の不快な行動は、お前自身を救済するために暴露されなければならない。私たちは、これ以上、お前のような人間が学問を墮落させ汚染することを許さない。私たちは、お前の小さなネットワークを破壊し、追い出すことを目的としている。私たちのアドバイスを受け入れ、消え去ってくれ。

図5 レター 2 お前という人間、つまりお前が汚らしいクズのレズビアンだということは、…と…も知るべきだ。
お前に空気を吸う資格はないんだよ、病気のビッチめ。
地獄へ落ちろ。

図6 レター 3 ジル・バレンタイン
反抗的、気難しい、身勝手、出世主義の雌ウシ。これがお前の同僚や学生、その他すべての人が思っていることだ。
汚らしい、醜い、性的魅力を利用して男につけ込む女、不感症のレズビアン。
お前の両親はお前のことをどう思っているのだろうか。お前の両親は自分たちにも責任があることを理解しているのか？理解するべきだ。

図7 レター 7 おやおや、私たちはみだらな少女だったよな？カンファレンスバーでビールを飲んでいる人々が、お前に言っている内容は驚くべきものだ。小さなレズビアン「友人」さえ、お前が何者なのかを知っている。私たちは彼女たちのことを知っている、とても面白いことになっている。お前は私たちを楽しませる。それはとても面白いものだ。ところで、私たちはお前を見た。というより、通り過ぎたときに臭いがした。お前はブタのようでありブタのような臭いがする。私たちはいつか悪臭を取り除く。それまでは、私たちはお前を見ている。まだ遅くはない。悔い改め、お前の汚物を私たちの喉に流し込むのをやめろ

図8 レター 8 レズビアン集団のチアリーダーの代表？いいや、最低な人間の代表と言った方がびつたりだ。

ナメクジに塩を塗ったらどうなると思う？
この夏は海に出てくるな。

図9 レター 9 お前の申請書をいくつか持っている。
ちょうど今、回し読みを終えた。
人々は、このようなものが出回るのを止めようとするが、実際にはとても簡単に手に入る。申請書の内容はとても興味深いものだ。
ひどく吐き気がするが、とても興味深い。もし病気でなかったなら、とても楽しんだろうに。先日、何人かでお前のどこが最も気持ち悪いのかについて話していた。最近、スコットランドでお前と会った人は、「この女はいったい何様なんだ？」とはっきり指摘していたな。そう、私たちはお前の傲慢さにうんざりしている。お前は自分のクソに価値があるとでも思っているようだ。お前はただの根性なしの愚か者であり、それに早く気づいたほうが、全員にとって良いことだ。
誰かからウェブページについて聞いたか？私たちは十分な材料を持っている。きっと悲鳴を上げるだろう。お前の本当の姿、つまり子どもは近づいてはいけない脅威で病的なお前のことを、ウェブページで世間に知らしめてやる。すぐにそのアドレスを送ってやる。心配するな、不潔なところからお前が落下するのは、それほど難しいことではない。

参考文献

- Bell, D. (1991) Insignificant others: Lesbian and gay geographies. *Area* 23: 323-329.
- Bell, D. (1994) Erotic topographies: On the sexuality and space network. *Antipode* 26(1): 96-100.
- Bell, D., and Valentine, P. (1995) The sexed self: Strategies of performance, sites of resistance. In *Mapping the Subject: Geographies of Cultural Transformation*, eds. S. Pile and N. Thrift, 143-157. London: Routledge.
- Bell, D., Binnie, J., Cream, J. and Valentine, G. (1994) All hyped up and no place to go. *Gender, Place, and Culture* 1(1): 31-47.
- Berrill, K.T., and Herek, G.M. (1992) Primary and secondary victimisation in anti-gay hate crimes: Official responses and public policy. In *Hate Crimes: Confronting Violence against Lesbians and Gay Men*, eds. G. M. Herek and K. T. Berrill, 289-305. London: Sage.
- Binnie, J. (1997) Coming out of geography: Towards a queer epistemology. *Environment and Planning D: Society and Space* 15(2): 223-237.
- Blomley, N. (1989) Text and context: Rethinking the law-space nex-

- us. *Progress in Human Geography* 13(4): 512-534.
- Bondi, L. (1997) Stages on journeys: Some remarks about human geography and psychotherapeutic practice. Paper presented at the *Inaugural International Conference in Critical Geography*, 9-13 August, Vancouver, British Columbia (available from the author at Department of Geography, University of Edinburgh, Edinburgh EH8 9XP, UK).
- Butler, J. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. London: Routledge. バトラー, J. 著. 竹村和子訳 (1999) 『ジェンダートラブル——フェミニズムとアイデンティティの攪乱』青土社.
- Chouinard, V. (1994) Geography, law and legal struggles: Which ways ahead? *Progress in Human Geography* 18(4): 415-440.
- Chouinard, V. and Grant, A. (1995) On being not even anywhere near "the project": Revolutionary ways of putting ourselves in the picture. *Antipode* 27(2): 137-166.
- Comstock, G. D. (1989) Victims of anti-gay/lesbian violence. *Journal of Interpersonal Violence* 4(1): 101-106.
- Cresswell, T. (1996) *In Place/Out of Place: Geography, Ideology and Transgression*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Gibson-Graham, J. K. (1994) Stuffed if I know!: Reflections on post-modern feminist social research. *Gender, Place, and Culture* 1(2): 205-224.
- Giddens, A. (1989) A reply to my critics. In *Social Theory of Modern Societies: Anthony Giddens and His Critics*, eds. D. Held and J. B. Thompson, 249-301. Cambridge: Cambridge University Press.
- Glass, D., and Singer, J. (1972) *Urban Stress*. London: Academic Press.
- Grant, A. (1997) Dyke geographies: All over the place. In *Straight Studies Modified: Lesbian Interventions in the Academy*, eds. G. Griffin and S. Andermaker, 115-129. London: Cassell.
- Gross, L., Aurand, S. K. and Adessa, R. (1988) Violence and Discrimination against Lesbian and Gay People in Philadelphia and the Commonwealth of Pennsylvania. Philadelphia: Philadelphia Lesbian and Gay Task Force (available from the Philadelphia Lesbian and Gay Task Force, 1501 Cherry Street, Philadelphia, PA 19102).
- Hall Carpenter Archives/Lesbian Oral History Group eds. (1989) *Inventing Ourselves: Lesbian Life Stories*. London: Routledge.
- Herek, G. M. (1992) The social context of hate crimes: Notes on cultural heterosexism. In *Hate Crimes: Confronting Violence against Lesbians and Gay Men*, eds. G. M. Herek and K. T. Berrill, 89-104. London: Sage.
- Johnson, L. (1994) What future for feminist geography?. *Gender, Place, and Culture* 1(1): 103-113.
- Johnston, L., and G. Valentine (1995) Wherever I lay my girlfriend that's my home: The performance and surveillance of lesbian identities in domestic environments. In *Mapping Desire: Geographies of Sexualities*, eds. D. Bell and G. Valentine, 99-113. London: Routledge.
- Katz, C. (1992) All the world is staged: Intellectuals and the projects of ethnography. *Environment and Planning D: Society and Space* 10(5): 495-510.
- Kobayashi, A. (1990) Racism and law in Canada: A geographical perspective. *Urban Geography* 11(5): 447-473.
- Kristeva, J. (1982) *Powers of Horror: Essays on Abjection*. New York: Columbia University Press. クリステヴァ, J. 著. 枝川昌雄訳 (1984) 『恐怖の権力——〈オブジェクション〉試論』法政大学出版局.
- MacKinnon, C. (1989) *Towards a Feminist Theory of the State*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Martin, B. (1988) Lesbian identity and autobiographical difference/s. In *Life/Lines: Theorising Women's Autobiography*, eds. B. Brodzki and C. Schenck, 77-103. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- McDowell, L. (1990) Sex and power in academia. *Area* 22(4): 323-332.
- McDowell, L. (1992) Doing gender: Feminism, feminist and research methods in human geography. *Transactions of the Institute of British Geographers* 17(4): 399-416.
- McNay, L. (1994) *Foucault: A Critical Introduction*. Cambridge: Polity Press.
- Miller, N. K. (1991) *Getting Personal: Feminist Occasions and Other Autobiographical Acts*. London: Routledge.
- Moss, P. (1998) A sojourn into the autobiographical: Researching chronic illness. Unpublished paper (available from the author at Department of Geography, University of Victoria, Victoria, BC V8W 3P5, Canada).
- Okely, J., and Callaway, H. (1992) *Anthropology and Autobiography*. London: Routledge.
- Penelope, J. and Wolfe, S. eds. (1980) *The Original Coming Out Stories*. San Francisco: Crossing Press.
- Rachman, S. J. (1978) *Fear and Courage*. Harmondsworth: Penguin.
- Rose, G. (1993) *Feminism and Geography*. Cambridge: Polity. ローズ, G. 著. 吉田容子・影山穂波・佐藤真江・西村雄一郎・丹波弘一・福田珠己・山田朋子・吉田雄介訳 (2001) 『フェミニズムと地理学——地理学的知の限界』地人書房.
- Rose, G. (1997) Situating knowledges: Positionality, reflexivities and other tactics. *Progress in Human Geography* 21(3): 305-320.
- Saunders, P. (1989) The meaning of "home" in contemporary English culture. *Housing Studies* 4(3): 177-192.
- Sibley, D. (1995) *Geographies of Exclusion*. London: Routledge.
- Silverstone, R., Hirsch, E. and Morley, D. (1992) Information and communication technologies and the moral economy of the household. In *Consuming Technologies: Media and Information in Domestic Spaces*, eds. R. Silverstone and E. Hirsch, 15-31. London: Routledge.
- Smart, C. (1989) *Feminism and the Power of Law*. London: Routledge.
- Sommerville, P. (1992) Homelessness and the meaning of home: Rooflessness or rootedness? *International Journal of Urban and Regional Research* 16(4): 528-539.
- Stanley, L. (1992) *The Auto/biographical I*. Manchester: Manchester University Press.
- Valentine, G. (1989) The geography of women's fear. *Area* 21(4):

- 385-390.
- Valentine, G. (1993a) (Hetero)sexing space: Lesbian perceptions and experiences of everyday spaces. *Environment and Planning D: Society and Space* 11(4): 395-413. バレンタイン, G. 著, 福田珠己訳 (1998) (異)性愛化した空間——日常空間に対するレズビアン知覚と経験. 空間・社会・地理思想 3: 77-95.
- Valentine, G. (1993b) Negotiating and managing multiple sexual identities: Lesbian time-space strategies. *Transactions of the Institute of British Geographers* 18(2): 237-248.
- Valentine, G. (1993c) Desperately seeking Susan: Geographies of lesbian friendships. *Area* 25(2): 109-116.
- Valentine, G. (1996a) An equal place to work?: Anti-lesbian discrimination and sexual citizenship in the European Union. In *Women of the European Union: The Politics of Work and Daily Life*, eds. M. D. Garcia-Ramon and J. Monk, 111-125. London: Routledge.
- Valentine, G. (1996b) (Re)negotiating the “heterosexual street”: Lesbian productions of space. In *Body Space: Destabilising Geographies of Gender and Sexuality*, ed. N. Duncan, 146-155. London: Routledge.
- von Schulthess, B. (1992) Violence in the streets: Anti-lesbian assault and harassment in San Francisco. In *Hate Crimes: Confronting Violence against Lesbians and Gay Men*, eds. G. M. Herek and K. T. Berrill, 65-73. London: Sage.
- Women and Geography Study Group of the Institute of British Geographers (1984) *Gender and Geography: An Introduction to Feminist Geography*. London: Hutchinson.
- Women and Geography Study Group of the Institute of British Geographers (1997) *Feminist Geographies: Explorations in Diversity and Difference*. Harlow: Longman.

訳者あとがき

ジル・バレンタインは、セクシュアリティの地理学に関する研究、とくにレズビアン地理学における第一人者である。地理学者から強烈な嫌がらせを受けたバレンタインだが、地理学界からドロップアウトすることなく精力的に研究を続け、2017年からはシェフィールド大学の副学長を務めている。日本では、レズビアンの女性が日常の様々な空間の中でいかに抑圧されているかを示した論文(上記参考文献のValentine 1993a)やセクシュアリティの地理学に関する展望論文(Binnie and Valentine 2000)が、翻訳されている。ただし、論文でも触れられていたように、バレンタインの研究テーマは多岐にわたる。子どもやアルコールに関する地理学的研究も翻訳されている(例えば、Valentine 2004; Jayne *et al.* 2011)。

今回翻訳した論文は、*Antipode*に掲載されてから20年以上経過している。その論文をなぜ今翻訳すべきと考えたのか。以下に、その理由を二つ述べたい。

一つに、セクシュアリティの地理学における先駆者バレンタインが受けた辛い経験と、それを乗り越えた彼女の強い意志の上に、セクシュアリティの地理学が存続していることを紹介したいと考えたためである。もちろん、バレンタイン以外にもセクシュアリティの地理学の発展に貢献した研究者は多くいる。しかし、仮に、バレンタインが嫌がらせに屈して、地理学界を去っていたら、この分野がここまで発展していなかっただろうとも思う。

近年、日本の地理学においても、徐々にセクシュアリティ、とくにセクシュアルマイノリティを扱った研究が増えている。性の多様性に対する関心や認識が高まっていく中、セクシュアリティに関する地理学的研究は今後さらに増加していくと考えられる。そのような希望的観測から、地理学のみならず幅広い分野の研究者や学生に、地理学界で起きた悲惨な事件を紹介するため、訳者はバレンタインの論文の翻訳という手段をとった。

もちろん、この事件は日本の地理学では以前から言及されてきた。村田(2002)は、地理学という「公的」な学問においてセクシュアリティの問題が無視されていることを指摘するために、バレンタインの事件に言及している。山崎(2006)は、バレンタインの事件を学問内における差異のポリティクスとして分析している。ただし、バレンタインの受けた嫌がらせの悲惨さは、手紙の内容およびその視覚的な要素からより強く伝わってくる。そこで、読み手にその衝撃が十分に伝わるよう、単に嫌がらせを受けたが乗り越えたという事実だけではなく、その内容を資料とともに詳細に記そうと考えた。

しかし、訳者は読み手の不安を煽り、落胆させたいわけではない。バレンタインが嫌がらせを乗り越えたように、この翻訳が肯定的な意味として読まれることを願っている。

また、セクシュアリティの地理学は非常に小さな下位分野ではあるが、今日まで発展してきた。アイザック・ニュートンが「私が彼方を見渡せたのだとしたら、それは巨人の方の上に乗っていたからだ(If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants)」と書いたように、研究者は先人たちの研究をもとに新たな発見を見出している。ただし、そのように発展できるのは、そもそも学問やその下位分野が継続して成り立っているからである。小さな発見の積み重ねによって成長した「巨人」が倒れてしまつては、学問分野は続いていかない。バレンタインの事例は、攻撃に立ち向かったからこそ、セクシュアリティの地理学が学問体系の中にあり続けている

ことを教えてくれる。このような先人たちのおかげで、セクシュアリティの地理学という分野が守られたことを、訳者は再認識したい。

二つに、研究者かどうかを問わず、バレンタインの論文は人々を勇気づけると考えるからである。訳者は、研究を通して多くのセクシュアルマイノリティと交流してきた。その中には、セクシュアリティに起因する日常生活の辛さから、自ら命を絶つことを考えた者もいる。2016年に世田谷区が公表した「性的マイノリティ支援のための暮らしと意識に関する実態調査報告書」では、アンケート協力者の49.7% (480名) が「自殺したいと思った」、18.9% (182名) が「自殺未遂」を経験したと回答している。そのような人々に対して、(不十分ながらも)地理学の立場から何ができるかと考えた。その答えの一つが、バレンタインの論文の翻訳だった。

原文のタイトル“Sticks and stones may break my bones”はことわざの一部であり、後半には“but words will never hurt me”と続く(バレンタインは原文において、wordsではなく悪口を意味するnamesを用いている)。ただし、論文の中で言及されているように、バレンタインは誹謗中傷が続くにつれ、手紙に書かれている内容を明確に否定することができなくなり、一種の攪乱状態に陥った。

ときに、言葉は物理的な暴力よりも人を深く傷つける場合がある。オンライン上での交流が増えた現在において、言葉の威力は一層強まっているように思える。ニュースは連日のように、SNSでのトラブルや誹謗中傷を報道している。中には、誹謗中傷に耐えかね、自ら死を選択したと推測される事例も起きている。このような状況だからこそ、バレンタインの言葉が、セクシュアリティが原因で(もちろん、セクシュアリティ以外の面でも) 日常生活に苦しさを感じている人々の力となるよう願っている。

付記

本稿は挑戦的研究(萌芽)「課題番号20K20735(代表者: 荒又美陽)」の助成を受けた研究成果の一部です。また、翻訳にあたり村田陽平先生、荒又美陽先生をはじめ、地理学分野でセクシュアリティ関連の研究に携わる方々からご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。

参考文献

- 村田陽平(2002)男性・異性愛をめぐる空間のポリティクス——1999年の西村発言を事例に. 人文地理 54(6): 557-575.
- 山崎孝史(2006)地理学のポリティクスと政治地理学. 人文地理 58(4): 377-398.
- Binnie, J. and Valentine, G. (1999) Geographies of sexuality: A review of progress. *Progress in Human Geography* 23(2): 175-187.
- ビニー, J., バレンタイン, G. 著, 杉山和明訳(2000) セクシュアリティの地理学——展望エッセイ. 空間・社会・地理思想 5: 105-117.
- Jayne, M., Valentine, G. and Holloway, S. (2011) *Alcohol, Drinking, Drunkenness: (Dis) Orderly Spaces*. London: Routledge. ジェイン, M., バレンタイン, G. ホロウェイ, S. L. 著, 杉山和明・二村太郎・荒又美陽・成瀬厚訳(2019)『アルコールと酔っぱらいの地理学——秩序ある／なき空間を読み解く』明石書店
- Valentine, G. (2004). *Public Space and the Culture of Childhood*. London: Ashgate. バレンタイン, G. 著, 久保健太・汐見稔幸訳(2009)『子どもの遊び・自立と公共空間』明石書店.